

「たすきをつなぐ」

学校の2月から3月は、「たすきをつなぐ」時です。先日、児童会役員の交代式を行いました。6年生から5年生へと渡すたすきには大きな意味があります。児童会活動、委員会活動、清掃活動など、先頭に立って活動することで大きく成長するからです。5年生が最初にするのは、2月26日に開催する「6年生との思い出を作る会」を中心となって運営し、6年生に感謝の気持ちを伝えることです。5年生は、目に見える仕事だけでなく、会を支える見えない仕事にも心を込めて準備に当たることが大切です。また、たすきを渡す側の6年生は、どのような顔で、どのようなメッセージを下級生に伝えるのか。また、これから卒業までの一日一日の授業の取組方、あいさつ、言葉遣い、廊下の歩き方、校内放送、登下校、清掃活動…などで、下級生にどのような姿を伝えられるかが問われます。素晴らしいつなぎ方を期待します。

さて、「たすきをつなぐ」といえば、市町村対抗ジュニア駅伝もありましたが、毎年楽しみにしているのが「箱根駅伝」です。青山学院大学が4連覇をして総合優勝したことは記憶に新しいところですが、原監督という卓越した指導者がいなければ、青山学院大学の盤石な優勝劇は見られなかったと思います。先日、テレビの対談や雑誌の記事で、原監督の指導のひとつに、「当たり前ことは当たり前でやれ」というのがあることを知りました。「目標管理シート」を導入し、1年間の目標はもちろん、1カ月ごとの目標、それから週の目標などをA4用紙に書き込み、6人ほどのグループミーティングで進捗状況などをチェックし合うという取組だそうです。ただ、目標管理シートを導入するだけで上手くいくわけではありません。口酸っぱく同じことを繰り返し伝え、選手が言われなくても実行する状態まで引き上げるそうです。また、生活や練習の積み重ねにおいて、「当たりのレベル」が非常に高いそうです。時間を守る、脱衣所に私物を忘れない、自転車の並び方をきちんとする、靴を揃えて脱ぐなど、人としてのしつけの部分についてもチームが強くなるまでは、よく叱っていたのだそうです。そして、練習の意味も考えた上で、何でその練習をやるのか、大会に向けて自分がどういうふう練習をして状態を上げていくのか、ということは何回も何回も繰り返し選手に問いかけ、自分たちで考えられるようにしたそうです。また、ジョギングなど、軽い練習を疎かにしていると、原監督からのゲキが飛んだそうです。こうした取組をあたりまえにできるまで繰り返していることが、青山学院大学の強さの源なのではないでしょうか。3歩進んで2歩下がるような、地道な歩みを繰り返すことが、強くなる唯一の道なのだと考えると、学校も家庭も、原監督から学ぶことはたくさんありそうです。

校長 土井 安博